

**書 評**

**進化する宇宙 I, II**

**ライブラリ 宇宙を探る 2, 3**

フィールズ/ファッシュア/ポナンペルマ 共著  
佐藤文隆/高原まり子 共訳  
(サイエンス社 昭和59年4月25日刊 各2,500円)

本書は宇宙の進化に関する入門書である。ここでいう宇宙は、従来の天文学の枠を超えており、地球や生命の起源までも論じられている。現在、学問の間の交流が叫ばれているが、本書でも生命の起源の問題は生物学、宇宙の有限、無限の問題は天文学というようにに区別せず、現在の天体や惑星、さらには生命までも、宇宙の進化という共通の線上で扱われている。つまり、地球の形状や生命の誕生も、現在宇宙で観測される実質から推測できる進化論の当然の帰結として議論されている。

このように、本書は普通の天文学の入門書とは異なっており、扱われる題材も、宇宙の進化を理解するのに不可欠な事項に限定されている。そして知識の羅列よりは、むしろ相互の関連に力点がかけられている。そのため章立てもユニークで、前半(訳書のIにあたる)では、地球から宇宙全体に至る天文学的宇宙を、現在までの観測から概説している。現在の宇宙には様々な進化段階の天体が存在するので、ある天体の歴史を研究する際、現在における観測だけでも多くがわかる、という考えが底流をなしている。後半では、時間と空間の性質に触れたあと、宇宙自身から地球の起源に至る宇宙の歴史が描かれ、最後に宇宙に存在する生命について考察が加えられている。その際、前半で述べられた観測事実が鮮やかに対応づけられ、未解決の問題が多いながら、星の進化と生命の起源を結びつける、一応矛盾のない説明があることを力説している。

本書は、アメリカの大学における文科系学生のための教科書として書かれ、各章の終わりには、まとめ、問題、用語の説明もついている。問題は、深く考えればかなりの難問も含まれているが、本文を読めば一応解けるようにはなっている。本文は数式をほとんど使わず、難しい事項も巧みに比喩を使って平易に説明している。講演会などでよく感じるアメリカ人的な強い説得力で、最後まで読者を引きつけ、何となく理解した気持ちにさせてしまう。

だが宇宙の進化の問題がこれで本当に理解できたかという点と疑問。理解にも多くのステップがあり、本書を読んで得られる理解はその第一歩といえる。もっと深く理解するには、各章毎により専門的な書物や論文を読まなければならない。しかし物事を大局的に捉えることも一方では必要であり、その意味でユニークな本書は一読する価値があると思われる。訳文も非常に洗練されていて読みやすかった。

(新田就亮)

(今月は「私と天文学」はお休みさせていただきました。)

◇ 8月の天文暦 ◇

日	時	記	事
1	9	水星	東方最大離角
4	12	上弦	
7	17	立秋	(太陽黄経 135°)
12	1	望	
14	11	水星	留
15	14	月	最遠
18	15	天王星	留
20	5	下弦	
23	8	処暑	(太陽黄経 150°)
27	4	朔	
28	2	月	最近
28	24	水星	内合
30	8	木星	留

